

日本語の音声に 耳を傾けると…

【利用対象】 (学校教育) 中学校、高等学校
(社会教育) 成人一般、日本語教室

価格:15,750円(税込・送別) 解説書付き

VHS
ビデオ34分

文部科学省選定

【制作の目的】

私たちの言語生活は「話す」「聞く」「書く」「読む」という四つの領域から成り立っています。このうちの「話す」「聞く」は話し言葉による活動であり、〈音声〉を用いることにより行われています。

話し言葉による言語活動は、このように音声を土台として行われています。しかし、私たちがコミュニケーションをする際相手に伝えようとしているのは音声そのものではなく、音声によって表現される意味の方です。そのため、音声自体を意識するという事は普段あまりありません。また音声は、文字や絵と違い、それを発した瞬間から消えてなくなってしまいうため、自分がどんな発音をしたかを意識することもあまりありません。

しかし音声は、私たちの話し言葉による言語活動を支える土台としての働きをしています。文字では表しきれないさまざまな情報も伝えています。

このビデオでは、普段意識することのあまりない音声そのものを取り上げます。私たちが言語生活でどのような音声を使っているか、それらはコミュニケーション上どのような働きを担っているか、音声であれば伝えられるけれども書き言葉では伝えにくい情報にはどのようなものがあるか、方言の音声や外国人の話す日本語の音声にはどのような特徴がありその背景にはどのような事情があるのかなどについて、日常のドラマの形で提示しました。作品を御覧いただくことで日本語の音声について理解を深め、音声によるコミュニケーションの豊かさと働きについて考えるきっかけを提供することを目的としています。

第1話 気持や意図を 伝える音声

(10分)



第2話 方言の中の音声

(14分)



第3話 外国人の話す 日本語の音声

(8分)



企画・制作 独立行政法人 国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町3591-2
TEL 042(540)4300 FAX 042(540)4333
<http://www.kokken.go.jp/>

製作・販売 東京シネ・ビデオ株式会社

〒103-0022 東京都中央区日本橋室町1-8-8
TEL 03(3242)3151 FAX 03(3242)3182
<http://www.tokyocine-video.co.jp/>

内容

作品は3話から構成されています。

第1話の「気持ちや意図を伝える音声」では、同じ表現であっても、声の調子を変えることによって、さまざまな気持ちや意図を伝えることができるということを見ていきます。また携帯メールなど書き言葉の場合に、絵文字などを使って気持ちや意図を伝える工夫をしている様子が出てきます。

第2話の「方言の中の音声」では、スポーツの全国大会の会場で、共通語とは異なる各地の音声（イントネーション）に接する場面が出てきます。続けて、東北地方に家族旅行をした姉弟が、地元の人が方言音声と共通語音声を、場面や相手により使い分けていることを知ります。

第3話の「外国人の話す日本語の音声」では、外国人が話す日本語を路上やレストランで耳にした大学生が、日本人の音声と異なる点や、外国人に共通する日本語の音声の特徴に気づきます。

ユニットごとのねらい

第1話 気持ちや意図を伝える音声 (10分)

話し言葉では、同じ表現であっても、声の調子を変えることによって、さまざまな気持ちや意図を伝えることができるということを、中学生の麻美と加奈のエピソードをもとに紹介します。このエピソードでは、「本当」と「何やってんの」というセリフが、さまざまな声の調子で出てきます。例えば友達から「先生が結婚するんだって」と聞いて、「本当」と答えたとしましょう。声の高さの変化や声の出し方、リズムの取り方など、声の調子を変えることによって、その情報に驚いたのか、がっかりしたのか、感心したのか、あまり関心がないのか、疑っているのかなど、自分のさまざまな気持ちや意図を相手に伝えることができます。

このような気持ちや意図などの情報は、文字にしてしまうと抜け落ちてしまいます。そのため、手紙やメールなどの書き言葉では、思ったように自分の気持ちを相手に伝えられなかったり、時には誤解を与えてしまうこともあります。そこで後半では、書き言葉で気持ちや意図を伝えることの難しさ、またそれを伝えるための工夫を、大学生同士が携帯メールでやりとりするエピソードを通して見ていきます。

話し言葉と書き言葉では、自分の気持ちや意図を伝える方法やその難しさに差はあります。しかしいずれの場合でも、自分がどのような気持ちや意図でその言葉を使っているのかを相手に伝えることは、コミュニケーションをする上でとても大切なことです。

第2話 方言の中の音声 (14分)

【前半】中学生の純一とその姉で大学生の弘子は、卓球の全国大会の会場で、各地から応援に来ている人たちのいろいろな方言の発音を耳にします。①単語に決まったアクセントのない「無アクセント」地域でしばしば聞かれる平板なイントネーション、②北陸地方でよく使われる文末・句末のゆるやかなイントネーション（ゆるり音調）、③質問文における下降調のイントネーションに接し、自分たちの言葉と発音が違うことに興味を持ちます。

言葉の地域差というとき、共通語と異なる単語に注目されることが多いのですが、音声・アクセント・イントネーションの面でもさまざまな違いが見られます。普段の生活ではあまり意識しないで使っている音声にもさまざまな特徴があり、地域によって多様性があることに気づくことをねらいとしています。

【後半】音声（イントネーション）に方言による違いがあることを知った純一は、姉から方言のビデオを見せてもらい、山形県三川町ではカ行音をガ行音で発音していることを知ります。休みの日、純一は、三川町の隣町の鶴岡市に家族で旅行に行きます。

ビデオを見て、「雪」をユギと発音すると予想していた純一は、地元の店員さんがユギと共通語で発音をしていることにとまどいを覚えます。ホテルのフロントで純一は、従業員の人がユギと発音しながら会話をしているのを耳にし、相手や場面により共通語の発音と方言の発音を使い分けていることを知ります。作品の中では、国立国語研究所が鶴岡市で調査した音声の使い分けに関する調査結果も示し、いつも方言音声だけを使っているのではなく、相手や場面により共通語音声と使い分けていることに気づくことをねらいとしています。

第3話 外国人の話す日本語の音声 (8分)

近年、日本に住む外国人は増え、外国人登録者の日本の総人口に占める割合は平成16年末で1.55%となっています。

このビデオでも、大学生の千春と香織はさまざまな外国人に出会います。そして、さまざまな特徴のある日本語を耳にし、普段接している日本語の音声と違いがあること、そのさまざまな違いの中にも共通した特徴のあることに気づきます。日本語教師を目指す弘子の説明を聞き、外国人の話す日本語の特徴にはその人の話している言語による背景があることを理解していきます。

しかし、実はそのような音声の多様性は、方言による違いなど日本の中にも存在します。さまざまな音声が存在する背景を踏まえずに音声の表面的な特徴だけをとらえて、その人の個人的な能力や人間性を判断してしまうことの問題に三人は気づいていきます。外国人の話す日本語の音声の多様性を考えることを通して、これからの社会で多様な人々と一緒に暮らしていくためにはどうしたらいいのかを考える契機とすることをねらいとしています。

国立国語研究所「ことばビデオ」シリーズ〈豊かな言語生活をめざして〉

既刊

① 相手を理解する 言葉の背景を見つめると… (37分)

② コミュニケーションの「丁寧さ」「ほめる」というはたらきかけ (45分)

③ 方言の旅 (52分)

④ 暮らしの中の「あいまいな表現」 (35分)

各巻 15,750円(税込・送料) / 解説書付き

スタッフ

製作 横川 元彦
プロデューサー 川尾 俊昭
撮影 岩淵 弘

V 照 録 音
E 角田 憲一
明 清野 俊博
音 深田 晃
楽 矢込 弘明

助監督 米沢 昭宣
制作主任 川下 和裕
脚本・監督 富永 一